

## 註

〈註一〉初版では、神様の後、すぐに死神が現れるが、決定版では、神様の次に、悪魔が現れ、これは、人間をだましたり、そのおかしさたりするという理由で断られ、三番目に死神が現れる。

〈註二〉(落合)には、国文学者の田中優子氏から「落語で言う死神という概念は元来日本にはない」と口頭で指摘された旨が書かれている。

〈註三〉(今輔)によると、今輔は、落語「死神」を二代目金馬から受け継いだとのことだが、「このお話は円朝師匠のお作か、それとも昔からありましたものを口演したのか、先代金馬師匠が前座の頃、たった一度ききましたものを思出して、上演したのだそうでございます」と書かれており、この今輔の記述が正しいとすれば、死神を「高座で演りだしたのは、初代の円左さんですね」という六代目円生の発言(飯島)との整合性が問題である。もし、両方とも正しいとすれば、最初に、円左が演じ、後から、作者たる師匠の円朝が自ら演じたという事になるが、ほんとうに円朝が自ら演じていたのであれば、それが、どのようなものだったのか、二代目金馬の口演速記の内容と比べてどうだったのか、おおいに気になるところである。が、今のところ、それを示す資料は、円左の口演速記ともども、発見されていないようである。

〈註四〉(落合)は、初版と決定版を比べて、わざわざ、グリムが「死神を足元に立たせ続けた」と書いているが、これは、第二版を全く考慮にいられていないものと思われる。

〈註五〉外国の物語を、まるで、日本固有の物語であるかのように翻案する流儀は、円朝の翻案に限ったことではない。例えば、かの有名な「シンデレラ(サンドリオン)」という名は、「灰かぶり」とか「すすだらけ」という意味であることはよく知られているが、(鈴木)に紹介されているところによると、明治二〇年の「シンデレラ」の桐南居士による邦訳(翻案)では、この「シンデレラ」が、なんと、「おすす」という名前で登場している。だが、物語の性質上、この主人公には、

やはり、どうしても、靴をはいてもらわねばならず、かくして、「おすす」は、着物に靴という格好で舞踏会に出かけるという奇妙な事になるのである。

〈註六〉山本氏自身は、さらに、河竹黙阿弥作の歌舞伎狂言「盲長屋梅加賀鶯(めくらながやうめかがとび)」で五代目菊五郎が演じた死神に、円朝が触発された可能性を指摘していて、これを含めて、トリプルルーツであると話しておられた。詳しくは、(名人)の三三五ページ。なお、〈註二〉との関連で言うと、この歌舞伎狂言の存在から、日本でも、この時点で、すでに、歌舞伎の中では、「死神」が登場していたことがわかる。

## 参考文献

## 論文

(落合) 落合直文「グリムのメルヘンと円生の落語」(「日本大学農獣医学部一般教養研究紀要 三二」一九九六)

(市川) 市川久美子「死神」(「語りの世界 二九」一九九九)

## 単行本

(金田) 金田鬼一訳「完訳 グリム童話集(二)」(岩波文庫 一九七九)

(小沢) 小沢俊夫訳「完訳 グリム童話集(一)」(ぎょうせい 一九八五)

(吉原) 吉原高志・吉原素子訳「初版グリム童話集(二)」(白水社 一九九七)

(今村) 今村信雄編「落語全集(中巻)」(金園社 一九六一)

(今村) 今村信雄編「落語選集(二巻)」(西澤道書舗 一九六六)

(富田) 富田宏編「古典落語全集」(金園社 一九六九)

(三一) 「古典落語大系 第二巻」(三一書房 一九六九)

(落協) 落語協会編「古典落語(八)」(角川文庫 一九七四)

(円朝) 「三遊亭円朝全集 第七巻」(角川書店 一九七五)

(飯島) 飯島友治編「円生全集 第七巻」(青蛙房 一九六二)